

## 日本語指導入門期における「気持ちを伝える言葉」の指導実践

—低学年児童の思いに寄り添う指導を目指して—

加藤淳子（熊本市立城南小学校）・鹿嶋恵（崇城大学）

### 1. 実践の背景と目的

熊本市は日本語指導が必要な児童生徒が市内各校に散在する地域である。市教育委員会指導課の主管の下、市内公立学校5校（センター校と拠点校・兼務校）には日本語指導担当教員、同課には日本語指導協力員や支援員らが所属する（R7年度現在）。面談や担当者の調整後、センター校等では通級指導、その他受入校（在籍校）へは派遣指導が実施されている。指導は主に個別の取り出しで行われ、受入れ後2～3か月は日本語指導や生活適応指導等（初期指導：週4～6時間程度）、その後は日本語指導を継続する（定期指導：週2～4時間、2年程度）。

初期指導の初め3週間程度では、先輩の教員らが独自に作成したサバイバル日本語の教材集を活用することが多い（佐藤、2015）。同教材集では「痛い」「好き」「嫌い」「おいしい」等、児童が自らの感情や気持ちを伝える表現（以下「気持ちを伝える言葉」）も若干導入される。しかし、その後の日本語指導でこれら表現を十分に扱うまでには、時間を要するという課題がある。加えて、受入れ後数か月も経つと、友人関係の形成が進む一方、誤解等によるトラブルも発生し、本人のみならず周囲の児童や大人にも心理的負担が生じる場合がある。こうした状況の回避／軽減には、早い段階から児童が「気持ちを伝える言葉」を使えるようにすることが必要と考えた。

以上の背景から、入門期の児童が自分の気持ちを伝える日本語力の習得を目指し、「気持ちを伝える言葉」の指導を計画・実践した。本発表では、自作教材とそれを用いた実践内容、実践後に行った児童や在籍学級担任への聞き取り調査の結果、および今後の課題を報告する。

### 2. 実践の内容

#### 2.1. 実践の対象児童

実践の対象児童は4名である。以下、受入れ時の情報として、編入学年／母語（＝家庭での使用言語）／来日後の年月／編入前の就学状況／を示す。

児童A：1学年／ベトナム語／0か月／母国で小学1年修了／

児童B：1学年／ネパール語／2年4か月／年長時に1年通園／

児童C：1学年／ネパール語／再来日後4年（日本生まれ・一時帰国後2歳半で再来日）／年長時に1年通園／

児童D：2学年／ベトナム語／0か月／母国で小学2年修了／

#### 2.2. 実践の方法

1) 「気持ちを伝える言葉」の選定： 学級での作文活動や児童間でよく使用する言葉から6語（楽しいです、悲しいです、嬉しいです、やめて、頑張りました、疲れました）を選定した。

ただ、この6語では表しきれない気持ちや態度があり、7語（嫌です、面白いです、悔しいです、気持ちいいです、怒っています、残念です、一緒に遊ぼう）を加え、計13語とした。

2) 教材・教具の作成： 言葉の使用場面を示すイラスト（スライド）、言葉カード（図1）。



図1 言葉カード(13語)

- 3) **指導手順**： ①児童の困難な気持ちや経験を会話で確認。②スライドを見ながら気持ちや場面を想起。③カードを使って教員と児童間で会話練習。④〔後日〕振り返りと使用状況の確認。
- 4) **指導過程**： 指導時期や導入語数は、児童の日本語力や学校での様子によって調整した。児童Aは級友とのトラブル直後に6語を導入した。児童Bは学習意欲に波があり集中時間も短いため、状況を見ながら1回に1語ずつ導入した。児童Cは学級には馴染みつつも小さな争いやトラブルが多く「時々自分の気持ちを抑えられない」という本人の言葉から、13語を一括導入した。児童Dは、編入後1か月は日本語指導支援員による個別の学校生活支援も受けていたため、その終了後に2回分割で導入した。実践期間は2024年6月から2025年12月である。

### 3. 実践後の聞き取り調査の結果

実践後には、各児童と在籍学級担任に聞き取り調査を行った（日本語と通訳アプリを併用）。

結果、「気持ちを伝える言葉」を使った児童からは、気持ちが落ち着いた、友達ができた等の回答を得た。特に児童Aからは言葉を学んだことで相手の気持ちを考えるようになったという意識変化の声もあった。また担任からもトラブル減少や態度の落ち着き等の報告を得た（表1）。

これらの結果から、入門期の早い段階で「気持ちを伝える言葉」を指導することは、学級への適応や対人関係の形成に有効な手立てになり、日本語・教科学習の支えにも繋がると考えられる。

表1 「気持ちを伝える言葉」の指導：実践前後の状況や気持ちの変化

		児童A	児童B	児童C	児童D
実践前	困難さ／状況	意思疎通が不十分で、学級内で誤解からトラブル発生。周囲への不自信。	友達との関係作りが難しく一人遊びが多い。発話が少なく学習意欲に波。	「時々自分の気持ちを抑えられない」と本人から報告あり。	学習意欲は高く友達と一緒に楽しく遊ぶが、自分の思いを伝えられない。
実践時	時期	受入れ後22週目	受入れ後3週目～	受入れ後3週目	受入れ後5週目～
	導入語	6語（※その後担当教員交替）	13語（1回1語）	13語（一括）	13語（2回に分割）
実践後	調査段階	6語指導の4週後	13語指導の3週後	13語指導の3週後	13語指導の1週後
	児童からの回答	よく使う。気持ちが落ち着いた。言葉を学んで、相手の気持ちも考えるようになった。	先生には使ったが、友達にはまだない。	勇気を出して言うことができた。友達もできた。気持ちが落ち着いた。	「一緒に遊ぼう」はよく使うようになった。これからはもっと使うと思う。楽しくなると思う。
	在籍学級担任から見た変化	まだ教員の指示が通らないことがあるが、友達とのトラブルがぐっと減って、穏やかになったように感じる。	自分の気持ちを少し言えるようになった。自ら担任に話しかけるようになった。友達と遊ぶ姿も見えるようになった。	以前は毎日のように学級内で小さな争いやトラブルが生じていたが、それらが減少し、本人も落ち着いてきた。	「学校は楽しい」といつも言っている。

### 4. まとめと今後の課題

以上、本発表では、入門期の児童が自分の気持ちを伝える日本語力の習得を目指し、「気持ちを伝える言葉」の指導実践の内容と成果を報告した。今後の課題としては、選定した13語の妥当性の検証と指導方法のさらなる検討が挙げられる。特に「楽しい」「嬉しい」等、抽象度の高い表現は説明が難しく、低学年児童の発達段階や経験に即した提示方法を工夫する必要がある。今後も児童の気持ちに寄り添いながら、より効果的な指導方法を模索していきたい。

#### 《参考文献》

佐藤龍子（2015）「小学校における指導」熊本県立大学文学部日本語教育研究室編『第10回 帰国・外国人児童・生徒の日本語の先生と担任のための研修会 成果報告書』pp.3-7.